



**のじゃろり狐娘の
柔らかかおててで搾られたたい!**





1

ある国の首都
ここには様々な者が住む
人も魔物も、規格外の存在も



ひょ
ひょ

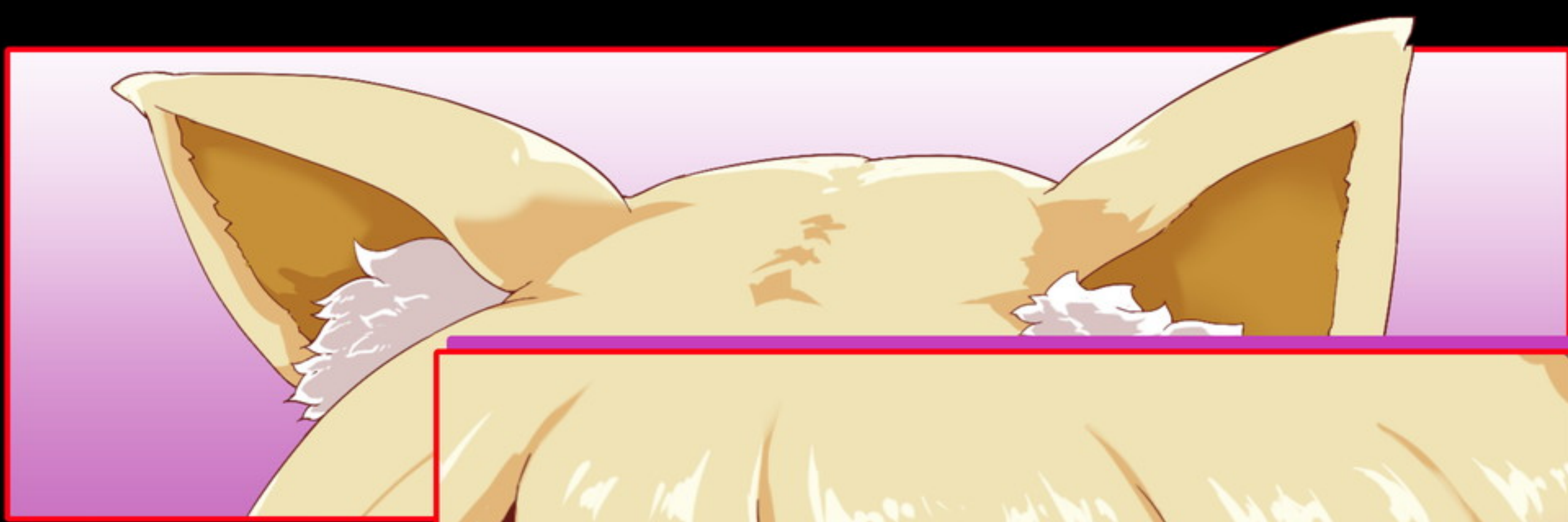
「もし、もしも
そんな立派な体躯のヌヅ」



「もし、もし」

「そんな立派な体躯のヌジ」

振り返ると、幼い獣人の娘が
じいっと俺を見つめていた



「もし、もし」

「そんな立派な体躯のヌジ」

振り返ると、幼い獣人の娘が
じいっと俺を見つめていた
珍しい格好で、キモノといたたか
住む世界が違うと一目でわかる

にっ





「朝霧の狐という旅籠をぶ」存知か？
小恥ずかしいんじやが…
道に迷ってしまっのの」


耳心

「朝霧の狐という旅籠を『存知か？』
小恥ずかしいんじやが…
道に迷ってしまっのの」

はたご？ はたご…

ああ、宿屋のことか

大きい町には人族以外にも
いろんな種族がくる
悪魔、天使、魚人、獣人
あげればキリがない



だが「朝霧の狐」といえば
知らない者の方が少ないだろう



だが「朝霧の狐」といえば
知らない者の方が少ないだろう

王侯貴族御用達の高級宿
たった一泊で並みの稼ぎなら
二月分は吹っ飛ぶ


それほどの破格なのに
平民からも客足が絶えず
遠い他国からも賓客が訪れる

だが「朝霧の狐」といえば
知らない者の方が少ないだろう

王侯貴族御用達の高級宿
たった一泊で並みの稼ぎなら
二月分は吹っ飛ぶ

それほどの破格なのに
平民からも客足が絶えず
遠い他国からも賓客が訪れる

世界情勢は議会ではなく
この宿で決められている
そう、冗談交じりに噂される
それが「朝霧の狐」だった



「すまんの案内まで
申し出てくれるとは」
俺の指をぎゅっと握り
トタトタと付いてくる

「すまんの案内まで
申し出てくれるとは」

俺の指をぎゅっと握り
トタトタと付いてくる

年端もいかないこの子は
よほど不安だったんだろう



「すまんの、案内まで

申し出てくれるとは」

俺の指をぎゅっつと握り

トタトタと付いてくる

くす

年端もいかないこの子は

よほど不安だったんだらう

場所だけ教えてもいいが

道中、もしもの事があつたら

寝覚めが悪い



「ヌシ、善い男じやな

ワシの目に狂いはなかつたの」

あどけなさを纏ったまま
妖しく笑う

ブ
ブ
ブ



「ヌシ、善い男じやな

ワシの目に狂いはなかつたの」

あどけなさを纏ったまま
妖しく笑う

手慣れた様子で
何かを確かめるように
指を握り、ほぐされる

グ
グ



「ヌシ、善い男じやな

ワシの目に狂いはなかつたの」

あどけなさを纏ったまま
妖しく笑う

手慣れた様子で

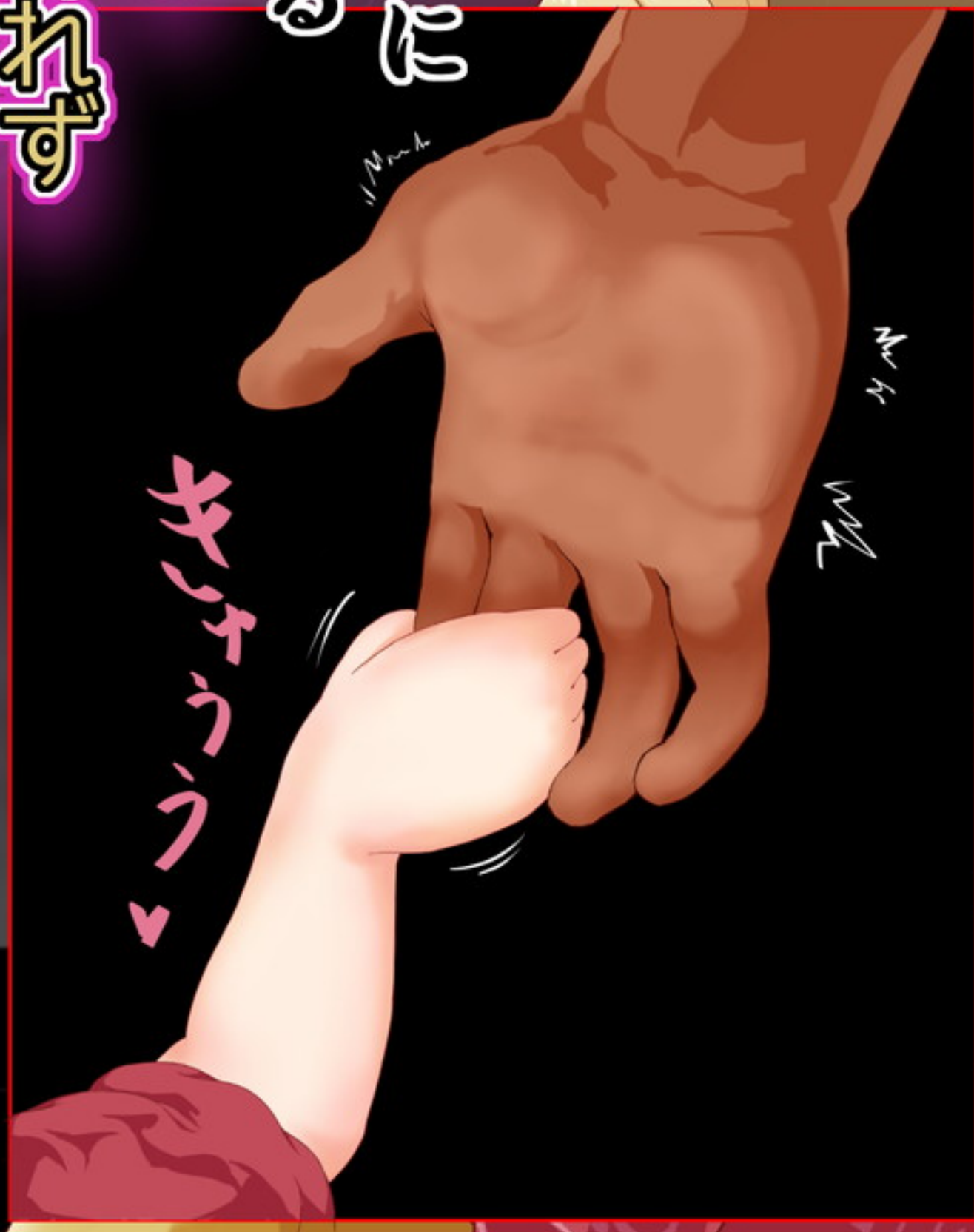
何かを確かめるように
指を握り、ほぐされる

「良い相じや……」

粗野だが捻くれず

太い芯が通つておる」

ヌシ、善い男じやな





「手は生き様を如実に現す」
「気にいったぞ
のう、情人にならんか？」

✂
「手は生き様を如実に現す」
「気にいったぞ」

のう、情人にならんか？」

「なに心配いらん」

「うみえて上手いんじやぞ」

カカと笑う二尾の幼狐
情人なんてどこで聞いたのやら……



「手は生き様を如実に現す」

「気にいったぞ」

のう、情人にならんか？」

「なに心配いらん」

「うみえて上手いんじやぞ」

カカと笑う二尾の幼狐

情人なんてどこで聞いたのやら……

ただ乾いた笑いを返すが――



「……フジが二尾に見える」

ふふ、そっつかせ」

あれ、いま俺

声をだしてたか……？

「……」から宿まで

四半刻といたたの



オ
オ
オ
オ

オ
オ

「……フジが二尾に見える」

ふふ、そっつかや」

あれ、いま俺

声をだしてたか……？

「……」から宿まで

四半刻といたたの」

「着くまで

よおく考えておくのじや」



小さな手がほのかに熱を帯び
じんじんと伝わる

そして
紅葉のような手指が
太い指をゆるりと
繰り返し握る



手とは、指とは

こんなに敏感なものだったか

指先から掌へ
ふにふにの指を這わせ
腹や先端を甘くこすり



締めすぎず緩すぎず
絶妙な力加減で指が上下する

ただ指を、手を
優しく馴染らされている



それだけで前が
破裂しそうなほど膨らみ
熱く疼いてしまっている

もう直に触れてほし……

まるで毒のような
甘い快感に意識をもつていかれ
もう、周りがよくわからない



いまだどんな顔をしてるんだ
だらしなく緩みきった顔を
皆に晒してはいないだろうか

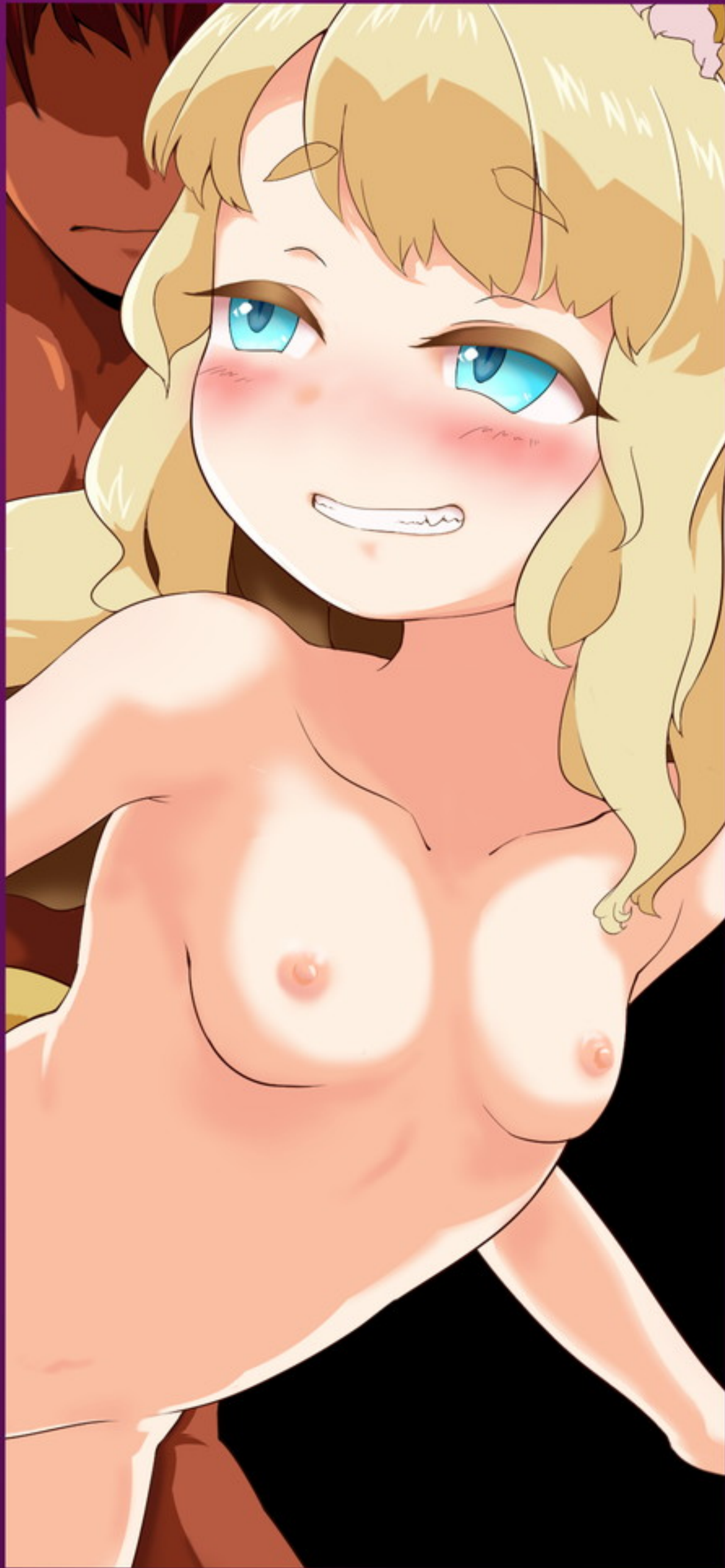
膨らんだ股間を布が擦りあげ
歩いたたび、たまらない痺れが走り
それがまた心を濁らせる

こんな子に不埒な事など
決してできなから...

ただ一歩一歩、宿に進むんだ
耐えて、耐えて、耐えて...









4

人外の手に堕ちゆく男に
何気なく提示されたのは
命運をわける選択



ニクニク

少し離れ
その小さな肢体を
見せつけるよう腰かけ

「のう、「」「」らで少し
変わった趣向はどつどつじゃ？」

「のう、「」「」らで少し
変わつた趣向はどつじや？」

少し離れ

その小さな肢体を

見せつけるよう腰かけ

にこ♡

「ヌジがあまりにも

可愛く悶えるものでの

「少し興が乗つた」

くすりと笑うと

目をあわせ、視線を促す



目を誘われたのは膝を重ね
絶妙に隠された秘部

裸の雄と雌が
そこを用いて何をするのか





目を誘われたのは膝を重ね
絶妙に隠された秘部

裸の雄と雌が
そこを用いて何をするのか

真っ赤になった肉棒は
涙を流して急かしている

んんんんん

んんんんん

クスッ

目を誘われたのは膝を重ね
絶妙に隠された秘部

裸の雄と雌が
そこを用いて何をするのか

真っ赤になった肉棒は
涙を流して急かしている

その奥が見たいと目は離れず
頬を体を紅潮させ
呼吸がままならないほど
心が高ぶっていく

ド
ッ
グ
ッ
ド
ッ
グ
ッ
ド
ッ
グ
ッ

そんな俺の様子を
満足げに眺めながら
女狐がゆらりと腰を動かすたび
くちゅ、くちゅと
微かに水音が響く

ふいに♡

びん♡

そんな俺の様子を
満足げに眺めながら

女狐がゆらりと腰を動かすたび
くちゅ、くちゅと
微かに水音が響く

「存外におぼっこのう
そういう男は好きじゃぞ
初々しいわい」

んんん

んんん

そんな俺の様子を
満足げに眺めながら

女狐がゆらりと腰を動かすたび
くちゅ、くちゅと
微かに水音が響く

「存外におぼっこのう
そっとう男は好きじゃぞ
初々しいわい」

確かに、女体を初めて
見るような初心な反応で……
羞恥に顔が燃えるようだ

くちゅ

くちゅ

くちゅ

「よいぞ……」

とくくと見るがよい」

ゆるりと開かれていく
太股と女陰のその隙間

その空間に閉じ込められ
醸造された香りが
花咲くように解き放たれる

い

わ

あ

『よいぞ...』

とくくと見るがよい』

ゆるりと開かれていく
太股と女陰のその隙間

その空間に閉じ込められ
醸造された香りが
花咲くように解き放たれる

焚かれた香と
瑞々しい雌の匂いが混ざり
強烈なフェロモンとなる

す...
う...
...
♡

「よいぞ……」

とくくと見るがよい」

ゆるりと開かれていく
太股と女陰のその隙間

その空間に閉じ込められ
醸造された香りが
花咲くように解き放たれる

焚かれた香と
瑞々しい雌の匂いが混ざり
強烈なフェロモンとなる

その香りは一呼吸で
脳内を容赦なく犯し
男を雄に墮とす

限界を超えて昂ぶった
直後に目に飛び込んだのは

誘うように濡れた
綺麗な桃色をした割れ目

ほわぁ..



限界を超えて昂ぶった
直後に目に飛び込んだのは

誘うように濡れた
綺麗な桃色をした割れ目

毛は生えておらず
その分はつきりと
しとどに濡れた淫肉が見える

時折ひくひくと動くそれは
手を招いているようだった

し
ら
み
♡



「ヌジが望まぬなら
次は手と口で可愛がってやるっ」

「…ぎゅぎゅ、ぎゅぎゅ…」

んく、

んく、

「ヌシが望まぬなら

次は手と口で可愛がってやるわっ」

「……ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ……」

「想像してみよ……」

「ワシの腰をつつかんで

好きなだけその剛直を

肉壺に突き立てるんじや」

し
ろ
お

「ヌシが望まぬなら

次は手と口で可愛がってやるわっ」

「……ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ……」

「想像してみよ……っ」

「ワシの腰をつつかんで

好きなだけその剛直を

肉壺に突き立ててるんじやっ」

「ヌシのソレだと

ワシの蜜壺は

おちちおちちになるのっ……

ぐぐぐ」

ふん、ふん、ふん……っ

ふん、ふん、ふん……っ

ふん、ふん、ふん……っ

自分の親指ほどしかない
その入り口が壊れてしまわないか

それは自分をひきとめる

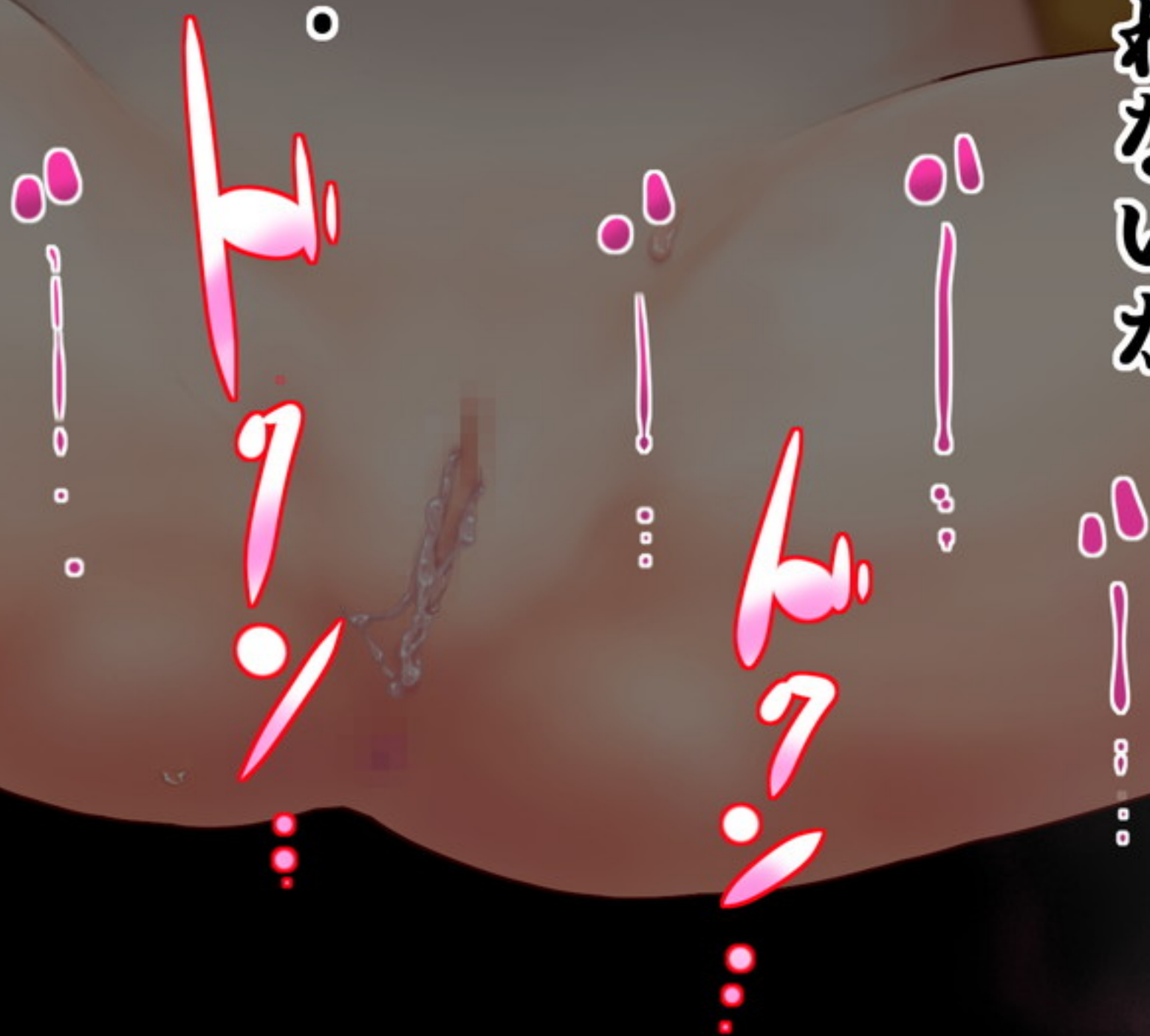
最期の建前だった

ん？
……

自分の親指ほどしかない
その入り口が壊れてしまわないか

それは自分をひきとめる
最期の建前だった

手だけでもう病み付きで
狂いそうなほどだった
あそこは一体どんなに……



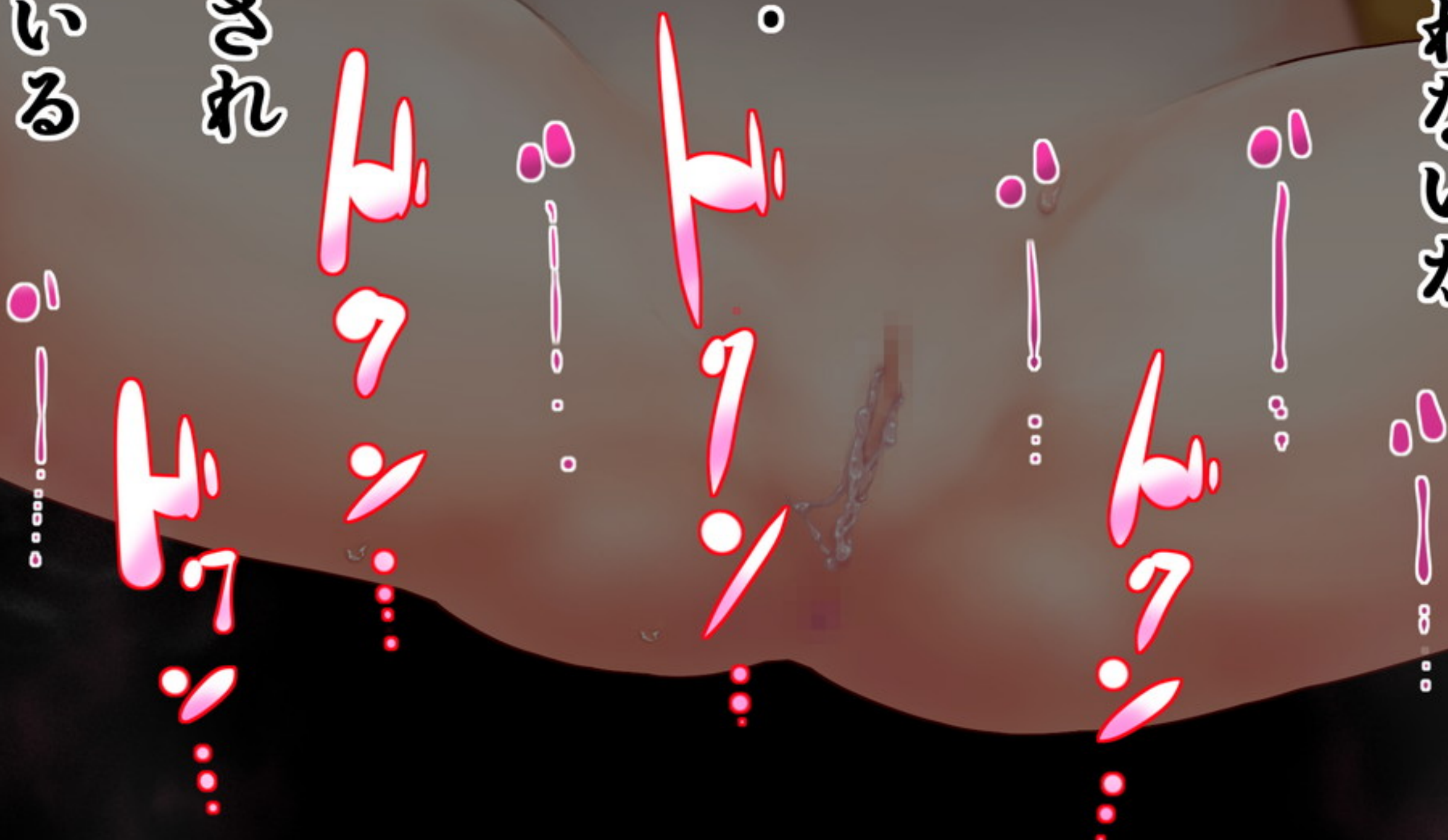
自分の親指ほどしかない
その入り口が壊れてしまわないか

それは自分をひきとめる
最期の建前だった

手だけでもう病み付きで
狂いそうなほどだった
あそこは一体どんなに……

一度味わってしまえば
二度と戻ってこれない
そんな予感すらあるのに

心のどこかには熱に浮かされ
目の前の小さな体で
淫欲を貪ろうとする獣がいる



必死に自分を抑える俺に
淫音が聞こえるよう
狭く小さな秘部をひろげ
上目遣いでくすりと笑う

「そして、肉ひだ一層一層が
肉棒に絡みつき舐め回し……」

くばあ

必死に自分を抑える俺に
淫音が聞こえるよう
狭く小さな秘部をひろげ
上目遣いでくすりと笑う

「そして、肉ひだ一層一層が
肉棒に絡みつき舐め回し……」

「ヌシの子種をねだって
根元から先までうねるのよ……」

子宮のある部分を撫でながら
耳朶にしみ込ませる様に誘う



必死に自分を抑える俺に
淫音が聞こえるよう
狭く小さな秘部をひろげ
上目遣いでくすりと笑う

「そして、肉ひだ一層一層が
肉棒に絡みつき舐め回し……」

「ヌシの子種をねだって
根元から先までうねるのよ……」

子宮のある部分を撫でながら
耳朶にしみ込ませる様に誘う

「……くふ！ くふふ！

いいぞ、良い顔になっってきたのうー！」



「「」まで体躯に差があるものと
経験は、まさかあるまい?」

「ヌンとっつては
またと無い機会じゃ
……ぞうじやる?」



とら
お
ころ

ド
グ
ン
ン

「「」まで体躯に差があるものと
経験は、まさかあるまい？」

「ヌンとっつては

またと無い機会じゃ

…ぞうじやる？」

にいと歯をみせ笑う

俺は喰われる

そんな確信すら感じさせる

妖狐の誘いを俺は…

とろ

とろお

ドッ
ク

ドッ
ク

ドッ
ク

「「」まで体躯に差があるものと
経験は、まさかあるまい？」

「ヌシトつては

またと無い機会じゃ

…ぞうじやる？」

にいつと歯をみせ笑う

俺は喰われる

そんな確信すら感じさせる

妖狐の誘いを俺は…

とても魅力的だと思えた

人生に一度しかない好機だと

とろ

とろ

ドッ

ドッ

ドッ

ドッ



「ただし契るなら
ワシが満足するまでじや」

す
...



「ただし契るなら
ワシが満足するまで、じゃ」

「なに、中途半端で終わると
ワシが生殺しになるんじゃないよ」

「それで構わぬなら
存分に契ろうぞ……」

「ただし契るなら

ワシが満足するまで、」

「なに、中途半端で終わると

ワシが生殺しになるんじゃないよ」

「それで構わぬなら

存分に契ろうぞ……」

「それともやはり

手とクチがよいかの？」



「亀の先をちゅちゅと吸いながら
手で翳るとの
みなよい声で鳴くんじや」

んんん

「亀の先をちゅちゅと吸いながら
手で撚るとの
みなよい声で鳴くんじや」

「フシの手の味は
ようく知っておるん？」

抗えず何度も
搾られた事を思い出し
体が震える

いぱー

「ヌジは吸われるより
舌で愛撫が良いか?」



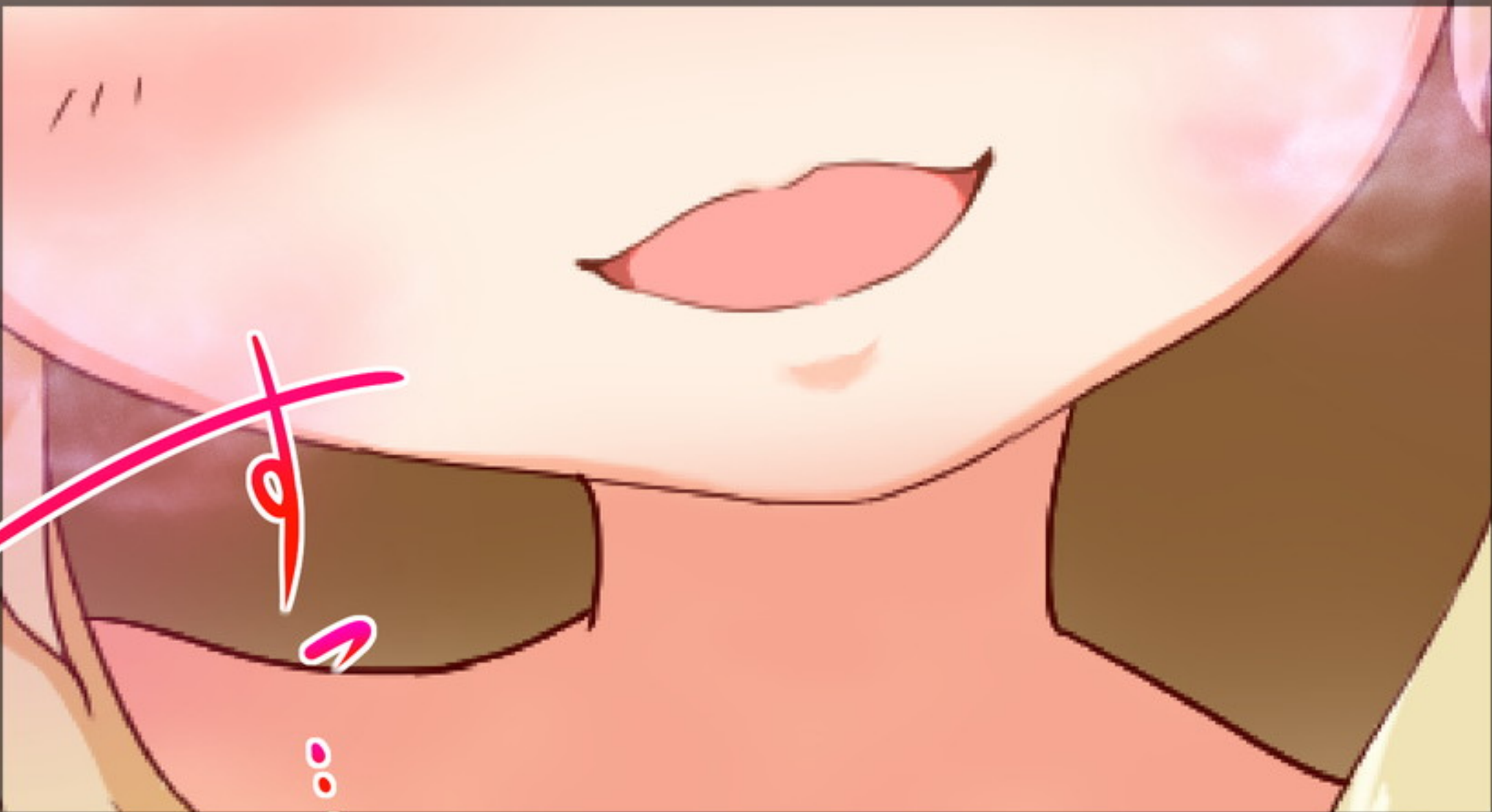
「ヌジは吸われるより
舌で愛撫が良いか?」

「ワシらの舌は

人族と少し違うようでの」

「柔らかい部分に

ぴたりと吸い付くのじゃ」



「ヌジは吸われるより
舌で愛撫が良いか？」

「ワシらの舌は

人族と少し違うようでの」

「柔らかい部分に

ぴたりと吸い付くのがせ」

「舌をゆるりと動かしてやると

男も女も、ただ喘ぐのみよ」



これ



「舐め取られるか
吸われるか……」

は、い

は、い

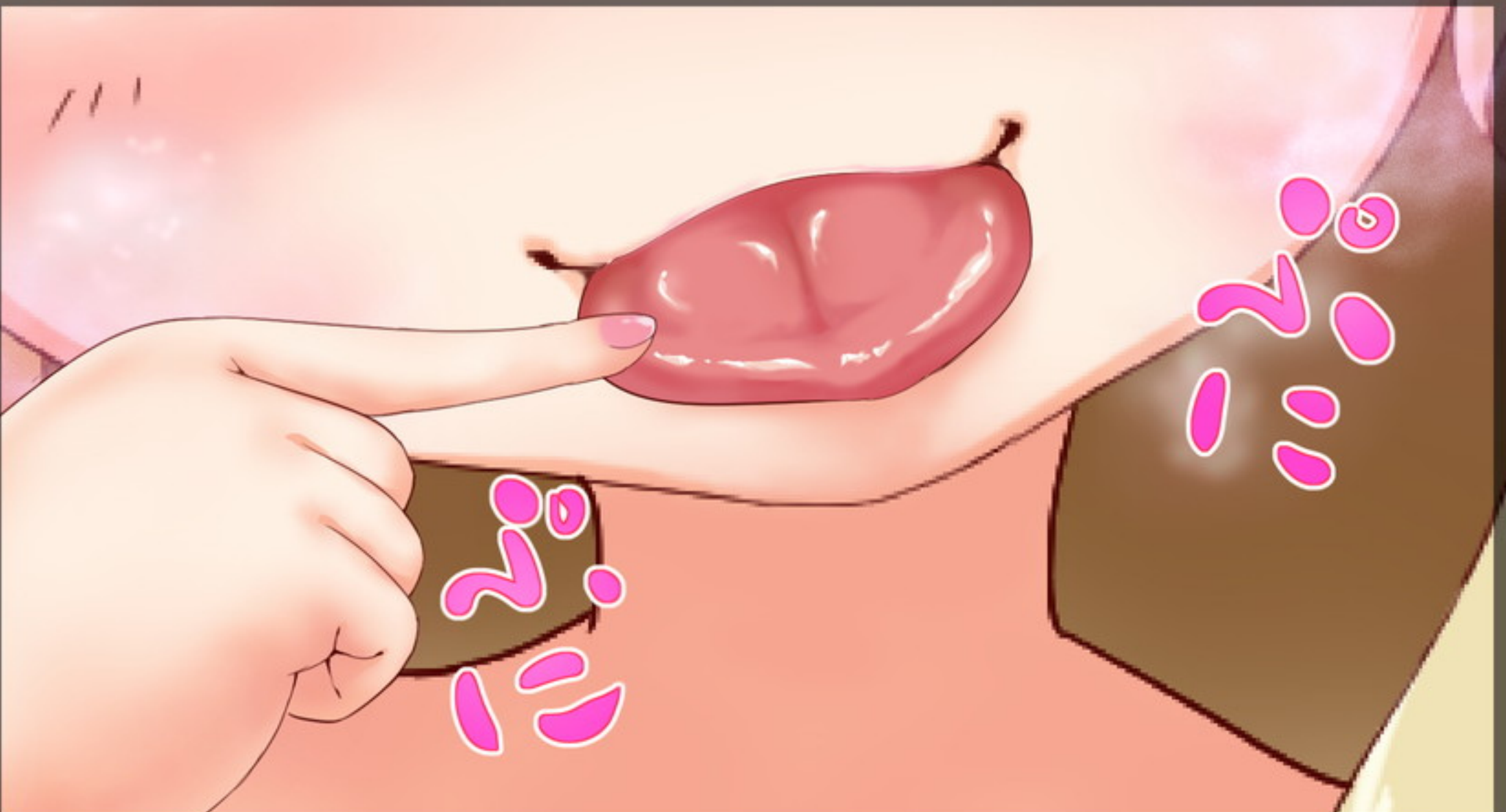
「ヌシはどちらかを
試してみたいかの？」

みせつけるように

舌をいじり

明らかに誘っている

みえすいた誘惑なのに…
舌に触れられる指が
この上なく羨ましく
無自覚に唸り声すら漏れる



「ふっ…
そんな血走った目をせげすとむ」

「ただワジを」

「求めれば良いのじや……」

「何も難しい「」とはあるまじう？」

「なに、試してみて」

「気に入らなければ」

「手だけで搾ってやるわ」



「ヌジが困る」「とは何も無い
……ぞっつじやる?」



いん
こん

ぞっつとするほど
安心する笑みを浮かべ
狐は言葉を続ける



「女陰でっもっ…」

「口吸いでっも」

「口吸いでも」

「女陰でも……」

「雄に生まれた事を

天に感謝するじやろっつよ

くふふ」





「さあ...

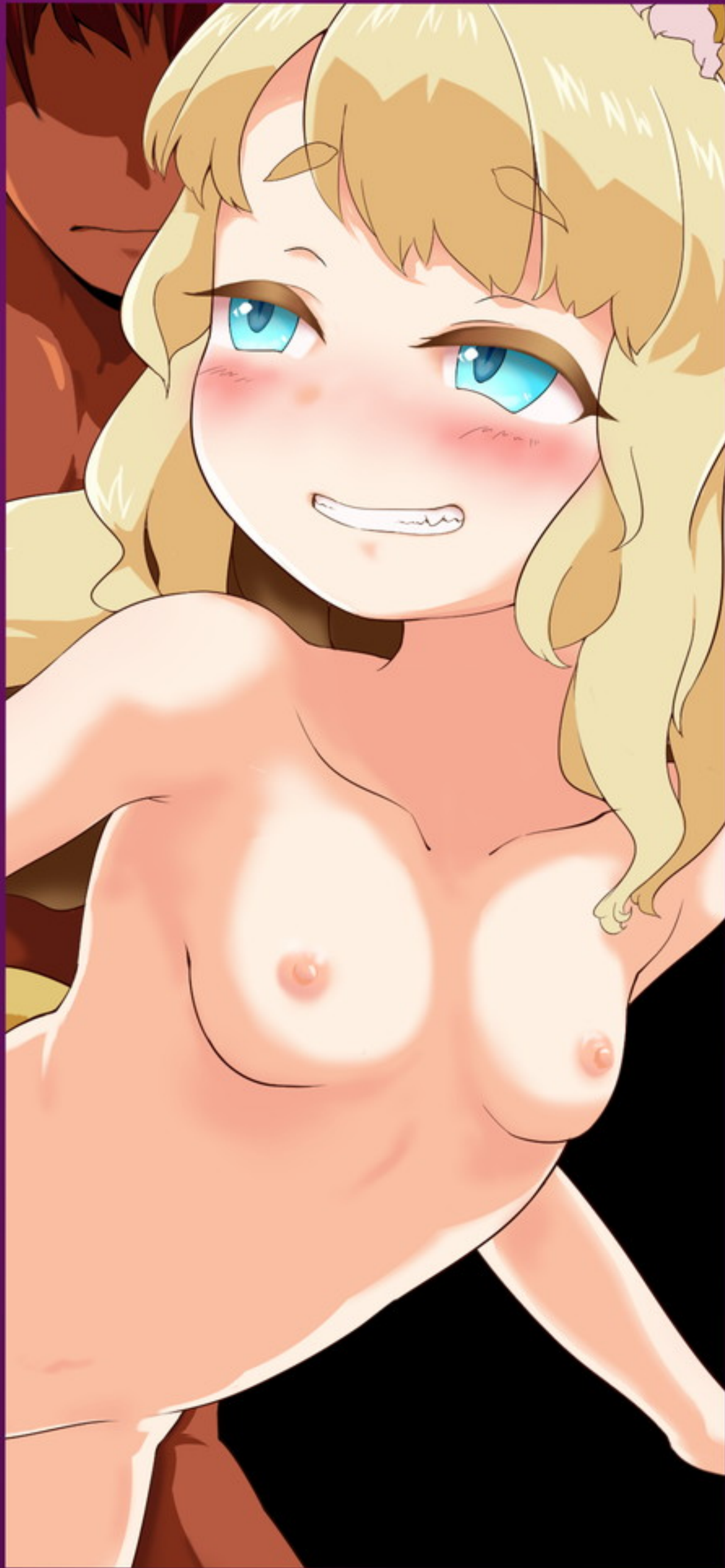
どちらにするのじゃ？」





手と口を見つめた





女狐にとびかかった